子どもと笑い(2)

今井　和子

はじめに

近年、子どもの笑顔や笑い声が少なくなっているのではないだろうか。いろいろな保育所で乳児保育の観察やビデオ撮りをしたり、多くの支援センターで幼い子どもに関わる機会をもっているが、乳児の楽しそうな笑い声を聞いたり、よく笑う子どもに出会うことが少なく、そのことが大変気がかりであった。

豊かなsmailやlaughter（以後「笑い」）は、心身の健康、滑らかコミュニケーション能力の育ちを促すばかりではなく、肯定的な自己表現や言葉の獲得にも重要な意味をもつ。と同時に子どもの自我の確立にも大きな影響をもたらすのではないかという仮説のもとに、共同研究グループをつくり、調査活動を行ってみた。そこで今回は、そのアンケート結果

に基づき「子どもと笑い」についての私の考えを述べてみたい。

研究の方法

「子どもと笑いと自我の育ち」に関するアンケートによる実態調査を行い、分析考察を行う。

(1)アンケートの作成とその内容

① ○、一、二歳児を受け持っている保育所の保育士を対象にしたアンケート

a クラス規模（子どもの人数、保育士の人数）

b その中にあまり笑わない表情の固い子、笑い声が出ないなど、気になる子がいるかどうか

c bの質問で「いる」と答えた子どもについて、性別、年（月）齢、おはしゃぎ反応、視線の共有、笑い声、自我のめばえと自己主張の有無を問う。

d 笑わない子への保育者の対応について

② 子育てセンターのスタッフへのアンケート

a スタッフについての質問（資格の有無、経験年数等）

表1 アンケート調査の実施

①保育所

地　方	園　数	保育士数
北海道	19	41
関東（除く東京）	103	184
東京都内	67	70
中部　北陸	20	42
四国　九州	5	17
計	214	354

②支援センター

配布したセンター	30箇所
回収（協力）センター	25箇所
スタッフ	38名

b～dについては保育所と同じ

(2) アンケート調査の実施

結果と考察

アンケートの中の設問「あなたのクラス（支援センターに通う子ども）の中に、あやしたり、ふざけたり、おはしゃぎ遊びなどしても、あまり笑わない気にかかる子がいますか？」

① 保育所の場合…四月、クラス担任になった時点から考慮し、記入してもらう。全体人数はクラスの子どもの数

② 支援センターの場合…通ってくる子は不特定のため、一日平均何人位の親子がくるか、を問い、その子どもの人数をそのセンター全体の子ども数と、捉えることにする

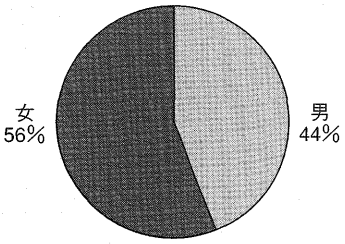
その結果「いる」と答えた人数はつぎの通りである。

笑わないと思える子どもについての実態調査

性別

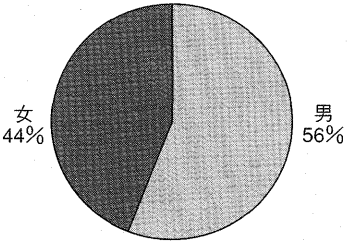
①保育所

男子（78）
女子（99）計177人（6%）
―全体2966人―



②支援センター

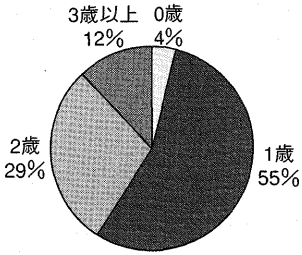
男子（37）
女子（29）計66人（12.6%）
―全体525人―



Ⅰ 笑わないと思われる子どもの人数（年齢別）

①保育所

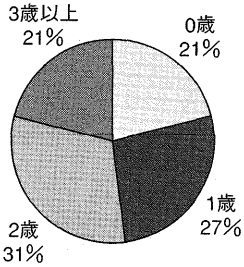
年齢	人数	全体人数	割合
0歳	6	246	2.4%
1歳	91	1329	6.8
2歳	48	1033	4.6
3歳以上	19	358	5.3
計	164	2966	5.5



※性別表による笑わない子どもの合計と、年齢別表の合計の数の違いは、年（月齢）に対し記入もれがあったためである。

②子育て支援センター

年齢	人数	全体人数	割合
0歳	14	80	17.5%
1歳	18	226	8.0
2歳	20	166	12.0
3歳以上	14	53	26.4
計	66	525	12.6

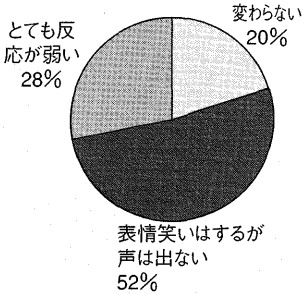


※複数のスタッフが支援センターに通う子どもの中で「笑わないと思える子ども」についてチェックしている所があったため、対象児の性別、年（月齢）が一致していた子どもは、同一の子とみなし除いた。

Ⅱ 笑わないと思われる子ども全体の結果

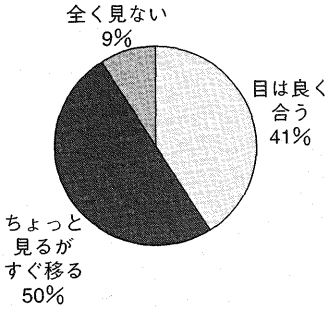
あやしたりふざけたり、色々なおはしゃぎ遊びをすると表情は変わるか

	保育園	センター
変わらない	34	16
表情笑いはするが声が出ない	92	22
とても反応が弱い	48	26



Ⅲ スタッフや保護者が、目を見て話しかけると目は合うか

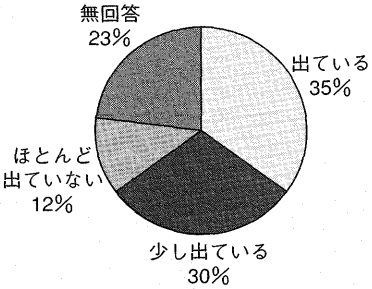
	保育園	センター
目は良く合う	72	27
ちょっと見るがすぐ移る	87	33
全く見ない	16	6



Ⅳ (A)

言葉や、言葉に代わる喃語はでているか

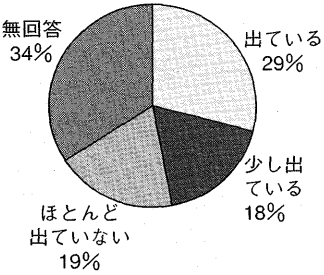
出ている	85
少し出ている	72
ほとんど出ていない	29
無回答	57



Ⅳ (B)

指さしは出ているか

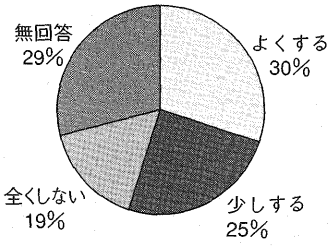
出ている	70
少し出ている	43
ほとんど出ていない	45
無回答	85



V　(A)

その子が1歳半～2歳半位の年齢にたっしている場合、気に入らない事があると、怒ったり、泣いたり、「イヤ」「ダメ」という拒否の言葉っを発し、自己主張しますか。

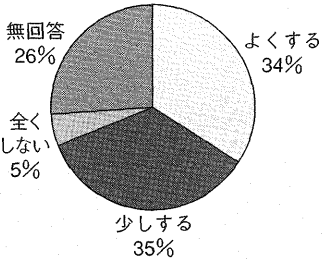
よくする	75
少しする	60
全くしない	38
無回答	70



V　(B)

自分の名前を呼ばれると、手をあげたり、振りむいたり、自分が誰であるか、わかっている反応をしますか。

よくする	83
少しする	84
全くしない	13
無回答	63



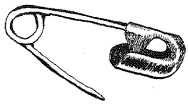
今回の研究目的の①に当たる「笑わない子どもが増えているか?」は、初めての調査でもあり、過去のものとは比較することはできなかったが、例えば、保育所の場合、各年齢の入所児童総数と笑わない子の割合をだすことによって、その実態を知ることはほぼ可能になったと思う。その結果は五・五パーセントであった（Ⅰ①参照）。

保育者が他の子どもたちと比較して「笑わないと思われる子ども」を見出すことは、可能ではないかと調査に踏み切った。が例えば、家庭では笑うが、園では笑わない子、保育者と子どもの関係性、クラスの環境のありようなど厳密に考えると、数値の信頼性は不十分である。が保育者の目で捉えた今回のアンケートの結果をみると、かなり深刻な状況になっていると考えられる。

保育者は子どものことを「このごろよく笑うようになった」などと、笑いを心身の健康のバロメーターとして表現する。乳児期の笑いは未来に向けて発達が促されていくという証でもある。生後二ケ月に表れる「社会的微笑」は人への基本的信頼が生まれはじめたことを意味するものである。乳児の重要な発達課題である「笑い」の乏しい子が保育所に六パーセントいるということは、サイレントベービーの問題と同様、子どもからのSOS発信と受け止めなければならない。

園児と子育て支援センターに通う在宅の子どもとの比較

支援センターでの「笑わない子ども」の数値については、センターに通うこどもが不特定のため、保育所のような割合を出すことはできなかったが、センターに一日平均何人位の親子が通ってくるか、を問い、その子



どもの人数を全体数とし、笑わない子どもの割合をだしてみたら、保育所と比較にならない十二・六パーセントという結果が出た（Ⅰ②参照）。センターの場合、アンケート対象者数も少なく、保育所と比較するのは無理がある。がアンケートの結果に見るように、在宅の子どもに「笑わない子ども」が圧倒的に多いことの理由を明らかにすることは重要であろう。在宅の母親が殆ど一人で育児に携わらなければならない事態に比べ、園児は毎日いろいろな大人や子どもと関われること、すなわち、人間関係の多様さがまずその大きな要因になっていると考える。

表情笑いはあるが、笑い声が出ない子どもについて

「笑わない子ども」の中には、smailは見られるが、声をたてて笑うこと（laughter）がない子どもが五十二パーセントいることは驚くべきことであった（Ⅱ参照）。「笑いは、情動の表出で言語的な行為ではないという先入観があり、声をたてて笑うことが子どもにとって大切な発語訓練の一環である」ことが正高信男氏の研究で明らかになっている。乳児の首のすわりが、笑い声がでるようになる条件であり、発声力（喃語）を促すためにも、たくさん声を出して笑うことが重要である。家庭でも保育所でも子どもが泣いたときには、対応せざるを得ないため世話をするが、おはしゃぎ遊びなどして大人も子どもも声を出して笑いあうようなゆとりが、生活になくなっていることがその要因であろう。

笑いを引き起こすものは「目」

笑わない子の中に、目を見て話しかけても「全く見ない」（九パーセント）、「ちょっと見るがすぐ視線を移す」が五十パーセントいた（Ⅲ参照）。

生まれたばかりの乳児が、特に注意をはらうのが人の顔であり、とりわけ目に注目することは周知の通りである。「目は感情の窓」、見つめあいによって

相手と感情交流し笑いが生ずる。すなわち笑いを引き起こすものが「目」であり、さらに見つめあいから共同注視（共鳴しあう）という関係が育っていく。やがて自分の見たものを、大好きな人にも一緒に見て欲しい。（「驚きや喜びを分かち合いたい」）という気持ちが強まり、人と気持ちを響きあい伝えあうというコミュニケーションが発達する。

今回、笑いの弱い子に視線の共有が不十分であることが明らかになった。これは、笑いを回復するには何から始めたらよいかを考える示唆でもあると思う。

保育所においては、ことに養護の大切さを心して関わることではないか。三歳未満児の生活においては、世話（養護）に費やす時間はかなり多い。おむつを換えたり、授乳をしたり、これらの世話をする時こそ、ひとり一人の乳児と触れ合える大切なコミュニケーションの機会である。その時を毎日どれほどの気持ちをこめて、あやしたり、ふざけたり、楽しんでいくかにかかっていると思う。

乳児の待機児が多く、定員の二十五パーセント増入所している多くの保育園にあって、保育者の疲労感や困難さは想像以上のものがある。がまずは日常的に行う養護をとおして、乳児の人への信頼感（自己信頼や他者信頼）や人と一緒にいる喜びを育むことが、今何より重要ではないかと考えさせられた次第である。

（東京聖徳短期大学）